

内部の者が見たら原作者の狙ひ所や皮肉がよく讀めるが一般的の觀客から見たら平凡な物語に過ぎない。單に女優生活の裏面を描いたものとしてもやはり陳腐なものである。それに物語の背景たる樂屋の描寫が物足りないし、オペラか芝居かそれとも暖昧なのはこうした物語には損である。舞臺裏の細い描寫一つでもつき物語を生かす事が出来たらうれしい。劇の骨子と云ふべき戀愛三部曲の舞臺面も余り滑稽である。松本英一氏の監督はそう云ふ意味で不満が多い。僅かに光一の家・於ける光一の描寫がさすが寫實的で好いと思つた。柳まさ子嬢の文子は全然作者の描くこのヒロインの氣持など到底出し得ない。さ察しられた。鈴木信子嬢の花子は御粗末ながら無難里見明氏の光一はやはり一番光つて居るが明るい藝術の持ち主だけ如何にも哀愁さが少しも感じられた。藤間林太郎氏の村島は缺乏ない。撮影は難がない。

興行價値——長尺の割には劇的變化が乏しいから余り此方面の價値は香しくあるまい。然し女優生活の裏面と云ふ物語の背景が觀客は興味を持つであらう。(拾月拾九日 大阪音邊劇場)

——山本綠葉